The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	児童文学と読者が出会うために : 作品と読者を「つなぐ」役割に関する3つの事例報告
Author(s)	肥後, 楽
Citation	IDUN ー北欧研究ー. 2025, 25, p. 129-142
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100756
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

［研究ノート］

児童文学と読者が出会うために
−作品と読者を「つなぐ」役割に関する 3 つの事例報告

肥後 楽

1. はじめに

本稿は，児童文学を受容する場と機会を創造し，実際に作品を読者まで届けるために，作品と人の間を「つなぐ」役割を担う人々がどのような役割を果たしているのか，その活動事例について報告する．

2020 年から 2024 年にかけて，筆者は「フィクションの作品，特に児童文学の力がどのように現代社会において普及するか」というテーマのもとに，文学作品に描かれるフィクションの世界が読者にどのようなプロセスを通じて受け取られるのか，受け取られる場をどのように創造することが可能かについて検討してきた．

文学作品を読者が手に取り読み始めるためには，単に図書館等の場があり，本が置かれているだけでは十分ではない．作品が読者の手に取られ，内容が読み込まれ，フィクションの力に読者が触れるに至るまで，実際にはどのような人が，どのような活動によって作品と人の間に介在しているのか．このプロセスを捉えることが，文学作品が社会に受容される機会を広げるための重要な鍵となるのではないかと考え，デンマークと日本で児童書を対象にこのような本と人とをつなぐ活動を展開する人物への調査を実施した．

はじめに，筆者らが実施したアウトリーチ活動を取り上げる．この活動ではデンマークの絵本をテーマに，俳優による絵本の読み聞かせと専門家によるミニレクチャーを行った．読み聞かせを担当した俳優さくらこりん氏へのインタビューと，イベント終了後に任意回答として実施したアンケートの結果について報告する．続いて，2024 年 3 月に筆者らが実施した研究会「フィクションの力を再考する−デンマークにおける取り組みを事例に−」における沢広あや氏の講演について報告する．3 つ目の事例として，東京子ども図書館理事長の張替恵子氏，職員の吉田真理氏に対して行ったインタビューについて報告する．

これら 3 つの事例から抽出した，文学作品と人とを「つなぐ」役割を果たす人々の活動に関する 4 つの観点を提示する．

2. 絵本読み聞かせ企画の実施

2021 年 10 月 3 日，筆者は大学のアウトリーチ活動の一環として絵本読み聞かせ企画「デンマークの絵本『フィン・フォトンさんと量子力学』の世界」を実施した．この企画は，小学生とその保護者を対象に，絵本の読み聞かせとデンマークの文化を紹介するミニレクチャーを組み合わせたプログラムとして開催した（以下，読み聞かせ企画）．実施時間は約 1 時間，実施形式は対面参加のみとし，大阪大学箕面キャンパス内にある箕面市立図書館を会場とした．

この企画では，デンマークで発表された絵本『フィン・フォトンさんと量子力学』を題材に用いた．『フィン・フォトンさんと量子力学』は，2017 年にデンマークで出版された量子力学をテーマにした絵本である．デンマークでは，それぞれ異なる科学技術の分野をテーマにした連作シリーズとして 2022 年 10 月時点で 5 冊が刊行されており，日本語版は 2020 年 12 月に出版された．

本書のデンマークでの出版の目的について，作者の一人である Ulrich Busk Hoff 氏は「量子力学や量子技術について話すと困惑する人が多いため，それが何を扱うものか見せる絵を必要としてきた」と語った[1]．また，物語があることで量子力学について話しやすくなり，物語にユーモアがあることで人々の科学技術に対する警戒心をほどき，興味を持ってもらいやすくなるというメリットが生まれるのではないかと予測していたと述べた．これらの動機から，絵本作家である Jan Egesborg 氏とともに本書は作成された．

本書は単に量子力学について絵付きで解説するのではなく，村の住民たちの物語と量子力学に関する知識の紹介が織り交ぜられた作品であることに特徴がある．作中では，架空の村である「ガチョウ村」に暮らす個性豊かな人々を紹介しながら，全員が協力して物理学者フィン・フォトンさんの息子ウィリアムの「寝ぼけ病」を治そうとする様子が描かれる．また，物語の主人公である物理学者フィン・フォトンさんが普段行っている物理学の実験の紹介として「重ね合わせ」や「量子もつれ」の概念が 3 つの実験と 1 つのエピソードによって説明される．

読み聞かせ企画では，プログラムの前半に，俳優のさくらこりん氏[2]による絵本の読み聞かせを行った．読み聞かせでは朗読に合わせ，場面ごとに適宜 BGM や登場人物の動きに合わせた効果音を PC から流した．また，参加者全員がストレスなく絵本を見られるよう，絵本に用いられた絵だけを編集して大型モニターに投影した．

読み聞かせの終了後に，15 分程度の時間で大阪大学外国語学部デンマーク語専

---

[1] 2022 年 9 月 26 日，Hoff 氏に対して本書の日本語版監訳者・田辺欧と翻訳者・勝矢博子が実施したインタビューにおけるコメント．

[2] さくらこりん氏は，大阪を拠点に主に子どもを対象とした演劇，ワークショップ等を専門に行う一般社団法人 KIO に所属する俳優・プロデューサーである．

攻教授の田辺欧氏によって，デンマークの文化に関する小学生向けのミニレクチャーが行なわれた．レクチャーパートでは，デンマークの地理的な位置について確認し，デンマーク生まれの有名企業や特産品を紹介した．また，コペンハーゲン大学の研究機関であるニールスボーア研究所が 2021 年に設立 100 周年を迎えることを説明し，デンマークで出版されている「フィン・フォトンさんシリーズ」と，デンマークで本書を用いて行われた小学生向けアウトリーチについて紹介した．最後に，デンマーク語で使われる特殊な文字を学びながら，翻訳時に工夫した点として登場人物の名前にかかる言葉遊びについて説明した．

当日は，午前・午後に各 1 回ずつ同じプログラムを実施した．イベントの参加者は，2 回合計で子ども 10 名（小学校 1 年生 4 名，2 年生 2 名，4 年生 2 名，6 年生 2 名），大人 16 名となった．

イベント終了後には，保護者向け・小学生向けの 2 種類の任意回答のアンケートを実施した．参加者数 26 人のうち，大人 13 人，子供 10 人から合計 23 枚のアンケート用紙を回収した．アンケートはイベントへの参加受付時に配布し，イベント終了後にその場で回収した．設問数は，大人 10 問，子ども 6 問に設定した．

読み聞かせを体験した小学生の参加者からは「絵本のおもしろかったところ・ふしぎだったところをそれぞれおしえてください」という設問に対し，いずれについてもウィリアムの寝ぼけ病とトランポリンに関するエピソードへのコメントが最も多く寄せられた．当該箇所はさくらこりん氏により効果音・BGM が挿入されていた部分である．もちろん，トランポリンという遊具や絵本のストーリー自体に参加した子どもが惹きつけられた可能性もあるが，ここに音という要素が加えられたことで，量子力学の実験に関連し，ともすれば難解な印象を与えるこのエピソードが，本書の主な対象者である小学生に強い印象を残すことに成功したと言える．

また，アンケートには読み聞かせについて問う設問は設けていなかったが，自由記述欄において大人・子どもいずれからも，読み聞かせという形態について「場面に応じて声のトーンやスピードを変えてくださり，お話に引き込まれました」「効果音や，絵の画面効果との組み合わせのやり方も興味深かった」「俳優さんの朗読が，感情が込もっておりよかった」「さくらこりんさんの読み方がとてもききやすかった」などのコメントが寄せられた．これらのコメントは，専門家による読み聞かせが参加者に強い印象を残したことを示している．

3. 大阪大学外国学図書館における研究会の実施

大阪大学外国語学部のキャンパス移転に合わせ 2021 年 5 月に新たに開館した大阪大学外国学図書館は，市の公共図書館である箕面市立図書館と大学図書館が

一体化した国内でも珍しい運営スタイルを持つ図書館である．そのため，従来の大学図書館とは異なる運用のあり方や，市民を対象にした本の貸出など新たな役割を担うことが求められている．

このような状況の中で，図書館において働く人々が本と人をつなぐためにどのような活動を展開すべきか，教員・職員・その他関心を寄せる関係者が共に先行事例から学ぶことを目的に，2024 年 3 月 5 日に「フィクションの力を再考する－デンマークにおける取り組みを事例に－」と題した 2 時間の研究会を実施した．

当日は基調講演者として沢広あや氏を招き，自身が推進してきた本と人とをつなぐ活動に関する報告を依頼した．当日の会場は箕面市立船場図書館とし，沢広氏はデンマークから zoom を用いてオンラインで参加した．沢広氏はコペンハーゲンにおいて公共図書館，学校図書館等で勤務した経験をもち，現在は児童書専門店で書店員として働きながら「Læs for livet（生きるための読書を）」の活動にボランティアとして参加している．当日，沢広氏は，自身の経歴を振り返りながら，デンマークの公共図書館，学校図書館，児童書専門店で推進してきた活動に関する基調講演を行った．ここでは公共図書館における活動と，ボランティアとして沢広氏が参画する「Læs for livet」に関する活動の報告について整理する．

3-1. コペンハーゲンの公共図書館における活動

デンマークの公共図書館では，図書館を多くの利用者が自らの居場所だと感じられる空間にするために，普段から図書館を利用する来館者だけでなく，本を目的として図書館を利用しない人に対してもアウトリーチ活動によってアクセスすることが重要だと考えられている．こうした前提のもと，図書館では単に来館者を待ち，来館者へのサービスについて工夫するだけでなく，職員自らが外に働きかけるアウトリーチ活動が積極的に推進されていることが語られた．

公共図書館では，読書への関心が薄く，普段から積極的には図書館を利用しない市民に図書館に足を運ばせるための施策として，小学生を対象としたクイズ大会の実施，各種講座の開講など，様々なイベントが実施されている．また，図書館の構造自体も，演劇ホールの設置，パスポート申請・免許証更新などを担う市民サービス課の図書館内への設置，グループワーク用スペースの設置など「本を読む，借りる」という図書に関する目的以外で来館する人が増えるための工夫がなされている．

沢広氏自身がコペンハーゲンの公共図書館で関わった具体的活動の一例として，移民の子どもを対象とした家庭訪問，幼稚園への訪問が紹介された．コペンハーゲンでは，移民としてやってきた外国人家庭で育つ子どもの言語的な遅れに対応するため，公共図書館の職員が家庭訪問し，デンマーク語の本をプレゼントした

り，家族と話をしたりするという活動が行われていた[3]．また，言語的背景がデンマーク語とは異なる家庭が多い地域の幼稚園を訪問する活動も行われていた．訪問先の幼稚園では，図書館の利用について説明を行ったり，読書をテーマに話をしたりする．これらの活動の中で，デンマーク語で書かれた作品に限ることなく，まずは保護者の第一言語で本を読みきかせ，とにかく言葉のシャワーをたくさん子どもに浴びせることを保護者には勧めていたと沢広氏は語った．

また，首都圏郊外に位置する複数の公共図書館における児童サービス専門の司書として活動する中で，本の購入，カウンターのレファレンスなど基本的な司書の職務に加えて，児童演劇の招へいなど児童やその保護者を対象としたイベントの企画や，市内の小学校・幼稚園へのアウトリーチ活動を担当していた経験が報告された．アウトリーチの具体的内容としては，コペンハーゲン市内の小学校に図書館の書籍をトラックに積んで持参し，学校の中でブックトークなどが行われていた．また，幼稚園では新刊の本を紹介したり，事前に希望する本についてヒアリングした上で，2 ヶ月に 50 冊程度の本を一気に貸し出す取り組みも行われていたとのことだった．さらに，高学年の子どもたちを公共図書館に招き，図書館の書籍の分類についてレクチャーを行う活動も展開されていた．なお，これらの積極的なアウトリーチ推進の背景には，利用者数，本の貸出数で今後の予算を決められる傾向があることも関係しているということが併せて共有された．

3-2. NPO 団体「Læs for livet」における活動

続けて，沢広氏が現在ボランティアとして関わっている NPO 団体での活動に関して話題提供が行われた．「Læs for livet」は，2012 年から活動を開始した NPO 団体である[4]．設立者である Rachel Röst 氏自身が厳しい環境の中で本に救われた経験を持ち，似た境遇にある子どもたちに本を寄贈したいという思いから活動が始められた．

Læs for livet から子どもたちが暮らす施設等に寄贈される本は，一般市民が公共図書館を通じて寄贈した本のほか，出版社，著者，書評家など本に関わる仕事につく人々からの寄贈によって集められている．これらの本は，まず団体職員やボランティアによって，寄贈可能な状態の本，それ以外の本に選別される．次に，状態が良く寄贈することが可能な本のうち，寄贈先の子どもたちの希望にできる限り叶う本が選出される．これに先立ち，文学ガイドと呼ばれるボランティアが施設等に派遣され，子どもたちに対して読んでみたい本に関する聞き取り調査を行う．文学ガイドは，子どもたちが希望した書籍やテーマについて把握し，NPO

---

[3] なお，このプログラムは現在ではなくなっているということが合わせて報告された．
[4] Læs for livet ウェブサイト（2024 年 9 月 27 日確認）https://laesforlivet.dk/

にその希望を持ち帰る．これらのプロセスを経て，状態が良く，かつ子どもたちの希望に沿った内容の本が，Læs for livet から子どもたちのいる場所へと届けられている．

Læs for livet の活動の一環に，図書館に子どもを誘致するのではなく，子どもたちの元へ本を寄贈するという形をとる活動があることには複数の理由が挙げられる．

第一に，子どもたちの中には，図書館を訪れ，自分が読みたい本を選ぶことにそもそもハードルを感じる利用者がいる．ハードルを感じる原因の一例として，自らの居住地から図書館までの距離が遠く来訪することが困難であるという地理的理由が挙げられる．さらに，公共図書館では，本が予定返却日に返却されなかった場合罰金が課される可能性があり，保護者が罰金のリスクを恐れ，子どもに図書館で本を借りることを許可しないケースがある．

上記のような地理的理由，金銭的リスクに関する懸念の他に，子どもたちが図書館に配架された本の中から，自分の読みたい本を見つけたり，選んだりすることに難しさを感じている場合もある．デンマークでは小学校の授業の中で本のジャンル分けについて学ぶ．しかし，何らかの事情で本のジャンルに関する知識を得られなかった子どもにとっては，膨大な本の中から，自分の関心に合う一冊を探し出すことは困難である．

また，デンマーク語の読解力は小学生程度だが自身は高校生であるような場合，文章の難易度に合わせて本を選ぶとその内容が自身の関心に合致せず，読書することを楽しめないという事例も観察されている．このようなギャップを減らすための取り組みとして，100 人の子どもたちに読みたい本やジャンル，内容に関するインタビューをとり，調査結果を出版社とシェアし，作家とのワークショップを通じて新たな書籍の内容が検討され，こうした子どもに向けたシリーズを新たに刊行するという取り組みも行われている．

このように，地理的，金銭的，学習度合いなど，様々な要因から図書館に自ら赴き，自分の関心に合致する本を選び，借りることに課題を抱える子どもたちが存在している．これらの子どもたちにも本を読み，作品に触れる機会を作るために，Læs for livet では積極的に子どもたちが住む施設まで出向き，本を直接届けているということが語られた．

4. 東京子ども図書館の活動に関するインタビュー調査

東京子ども図書館（以下，子ども図書館）は，子どもの本と読書を専門とする私立の図書館である．都内 4 箇所で始められた 4 つの家庭文庫を母体として 1974 年に設立され，現在は東京都中野区に所在している．

財団設立時には，①児童図書館の運営・実践モデルの構築，②資料室の設置と資料の貸し出しなど，研究推進・支援業務，③図書に関わる人材の育成，④出版・広報事業の 4 つの事業を展開することが目指された．また，設立当初から図書館を単に本を置き，子どもたちが本を借りるだけの場にするのではなく，本について話すことができる場にすることが意識されてきたという．

子ども図書館には全国から誰でも入館することが可能だが，本の貸出については，正規会員になった会員のみを対象としている．正規会員は 3 歳から高校生までが入会でき，3 歳に満たない子どもはプレ登録という形で保護者が代理で登録することができる．したがって，3 歳から高校生までを図書貸出の主な対象者としているが，実際には乳幼児から小学生低学年くらいまでの子どもの来館が最も多い．また，正規会員の資格には地区の制限を設けておらず，全国どこからでも来館し本を借りることが可能である[5]．

筆者は共同研究者の田辺氏と共に，2024 年 3 月に子ども図書館を訪問し，理事長の張替恵子氏，職員の吉田真理氏に対しインタビューを実施した．ここでは子ども図書館における本と人をつなげる取り組みのうち，人を育てる活動，場を創る活動に焦点をあて，具体的な 2 つの取り組みについてインタビューの結果に基づき報告する．

4-1. 人材育成制度

子ども図書館では，児童書と人とをつなぐ人材を育成するために，図書館業務に加えて研修プログラム，講座，講師派遣など様々な学びの制度が設けられている．

その一環として展開されているのが，研修生制度である．これは，児童図書館員として働くことを志す希望者（原則として 25 歳まで）が子ども図書館の研修生となり，1 年間インターンシップという形で子ども図書館で研修を行う制度である．期間中は，本の貸出など図書館職員としての業務を担当するが，何より優先されるのは来館する子どもたちと関わり，本を読んだり，本の話をしたりすることである．

子どもたちにとっては，決まった日に必ず子どもを最優先して本の話をする大人がいることが，来館の大きな動機になるという．また，このような研修生制度を導入し，研修生を受け入れることは，本と人とをつなぐ専門性を有した人材を育成することにつながるだけでなく「図書館に来ると必ず誰かが自分のことを意

[5] ただし，2 週間という貸出期限が設けられているため，実際に会員となって本の貸出を利用する来館者は近隣の住民が中心となり，遠方からの来館者は閲覧のみの利用となることが大半である．

識してくれる，自分が望めば大人と本に関する話をすることができる」「自分に合う本について考えてくれる大人が常にカウンターにいる」と子どもたちが思える環境に子ども図書館を整えることにつながっている．

さらに子ども図書館では，本と人とをつなぐ重要な活動に「お話」を位置付けているという．「お話」とは昔話などの物語を語り手がすっかり覚えて自分のものとし，本を見ないで語ること[6]を指す．子ども図書館では，2 年間にわたって子どもにお話を語ることを学ぶ「お話の講習会」という人材育成プログラムを設けている．このプログラムでは，受講生は 2 年の期間中に 6 つのお話を選び，子どもに語ることを基本に据えながら，お話の選び方や語り手としての心構え等について学ぶ．月 1 回の授業の中では，お互いの語りを聞き合ったり，講義を受講することが可能で，プログラム修了時には成果発表として受講生がお話を披露する場が設けられている．

4-2. 選書のプロセス

子ども図書館の大きな特徴として，選書のプロセスが挙げられる．子ども図書館では，年に 4 回季刊誌「こどもとしょかん」が発行される．ここには，現場の図書館員による書評，講習会や研究活動から得られた成果に関する情報の他「私たちの選んだ児童室の本」と題した新刊案内[7]が掲載される．この季刊誌に掲載する新刊を選ぶために，子ども図書館では「本の会」と呼ぶ会議を組織し，週 1 回～隔週 1 回のペースで掲載すべき児童書について議論している．

本の会に参加するのは，図書館員，編集部，事務職員をはじめ，レビュー会員，研修生，大学からの実習生など多岐に渡っている．彼らは分担して新刊に目を通し，新刊案内に掲載すべき本について議論を重ねる．掲載すべき本の候補は，各出版社から寄贈された書籍の他，株式会社図書流通センター（TRC）が発行する『週刊新刊全点案内』のチェック，児童書の専門書店に配架された新刊コーナーの視察（月 1 回程度）などを通じて選出される．

このように，可能な限り多くの新刊を見漏らすことなく候補にし，また選別のプロセスに多くの図書に関与する人々が加わり，議論することを通じて，子ども図書館として案内すべき書籍を選定し，機関誌での掲載や児童室への配架を行っている．

---

[6] 東京子ども図書館ウェブサイト（2024 年 9 月 27 日確認）https://www.tcl.or.jp/

[7] ここでいう新刊とは，発売から 1 年以内の児童書を指す．

5. 考察

本と人を「つなぐ」役割を果たす人の活動について，3 つの事例を取り上げ報告してきた．本節では，各事例から抽出された作品と読者の間に介在する専門家の役割と，このような活動が展開される際の課題について 4 つの観点から整理する．

5-1. 「大人と共に読む・聞く」ことの重要性

全ての事例を通じて語られたのは，本を子どもが一人で読むだけでなく，大人と共に作品を読む「読み聞かせ」，もしくは「お話（ストーリーテリング）」という形で共に物語を聞く体験の重要性だった．

読み聞かせ企画で絵本の読み手を担当した俳優のさくらこりん氏は，絵本の中で聞き手となる小学生の参加者にとって最も難しく，集中力が薄れる可能性が高い部分は，登場人物が行う実験について説明されるパートだと考えた．このパートは量子力学の原理を扱ったエピソードであり，物語が進行する部分と比較すると難解な印象を抱かせる．そこで読み聞かせでは，効果音と音楽を BGM として挿入し，子どもの興味を持続させる方法をとった．このように，読み聞かせという形式は，携わる大人が導き手となって子どもの本への関わりを持続させる手助けをすることが可能である．

本を通じて大人と関わったという経験が，子どもが成長とともに読書の習慣を身につけるために重要な役割を果たすということは，沢広氏，張替氏へのインタビューでも報告されている．沢広氏は，移民の家庭への訪問を通じて，訪問者の母語でまずは子どもたちへの読み聞かせを実施すること，そうしてたくさんの言葉のシャワーを浴びることが，子どもの読書体験を形作るために重要だということを繰り返し伝えたと報告している．

また，子ども図書館では，活字の文化である本に子どもたちが触れる際に，自ら読み始める前の段階で大人から「お話」を聞かせてもらったり，絵本の読み聞かせをしてもらったりする体験を持つことが重要であるという認識のもと，「お話の講習会」という人材育成プログラムを開講したり，図書館員が来館者に積極的に本の読み聞かせを行ったりしている．その背景には，文字を学ぶ前の時期に，大人からお話を聞かせてもらう体験が，子どもたちを楽しく読書の体験に導く有効な手段であるという認識がある．

以上のように，子どもと本との出会いの場面における，大人と共に読む・聞くことの重要性が 3 つの事例に共通して見出された．本と人とをつなぐ活動を担う人々は，子どもが文字を読解するようになる前の段階から，大人の口から語られ

る物語を大人と共に聞く体験について子どもを読書に導くために重要であると位置付けていることが確認できた.

5-2. 個別対応の重要性と予算的課題

図書館など本と人が出会う場においては，専門家による来館者への細やかな対応が本と人との望ましい出会いのためには欠かせないことがインタビューを通じて改めて示唆された.

沢広氏による講演では，子どもたちが読むことを望んでいるジャンルや本を正確に把握し届けるために，図書館職員が幼稚園小学校の教職員，時には直接子どもたちに対して聞き取りをする機会が設けられていることが報告された.

また，子ども図書館では，図書館員が来館する会員の成長や嗜好に合わせて共に本を選んだり，積極的に会員と本の話をしたりするよう心がけていることが繰り返し語られた．決まった日に来館者を最優先にして話しかけ，本について語り合う大人がいる場所だということが，子どもにとっては来館のモチベーションになる．実際に，中高生になり日常的に本を借りるために来館することが難しくなっても，進路の報告や折々のタイミングで子ども図書館を訪れるような利用者もいるという.

一方，日本，デンマークともに図書館を取り巻く予算的な厳しい状況が続いており，こうした本と人をつなぐ専門性を持つ人々を含む図書館職員の人件費は削減されやすい傾向にある．読書離れに対する懸念が叫ばれる一方で，今回報告したような読者一人一人の要望に寄り添う丁寧なケアに対する予算は減少の一途を辿っている.

デンマークでは夜間の長期間開放に取り組むなど，開館時間が延長される傾向があるが，同時に貸借の自動化等により可能な限り職員を減らし，人件費が削減されている．また，日本でも同様に，貸借を来訪者が図書館職員の手を借りず個人で行えるシステムが整えられつつあり，カウンターでの会話が生まれるきっかけは減少している．さらに，読み聞かせや「お話の会」の読み手をボランティアに依頼することにより，図書館員と来館者が会話をする機会は減少しており，その関係構築はさらに難しいものとなっている.

図書館で本と人をつなぐ役割を果たす人としてボランティアの役割は日本においてもデンマークにおいてもますます重要なものとなっている．デンマークではシニア層を中心にボランティアとして図書館で働く人の数が増加している．ボランティアは読書クラブにおけるファシリテーション，図書館のカフェの運営，イベントの補助など，多様な役割を担っており，今や図書館の運営に欠かせない存在である．日本における事例としても，読み聞かせや「お話の会」に話し手とし

て参加するなど，公共図書館においてボランティアが担当する仕事が増えてきていることが張替氏より語られた．

このように，読者ひとりひとりに合わせた丁寧な観察とケアがより良い本との出会いを作るために重要であることは明らかである一方，図書館職員などその役割を担う人々への人件費は減少傾向にある．こうしたギャップをいかに埋められるのか検討することは重要な課題である．ボランティアの役割の拡大はその対策の一環であると捉えることができる．また，上記のような細やかな対応がどのように読者へ影響を及ぼしているのか可視化を試みることも，予算的課題を改善するための一助になるのではないかと考える．

5-3. 選書の基準と方法

読者が必要な本に出会うために，本と人とをつなぐ人物によって，図書館にどのような本を配架するべきか，もしくは読者にどのような本を届けるべきかについて細やかな調査と検討が行われていることも報告された．

沢広氏からは，教育施設等に本をまとめて貸し出す際に，対象となる子どもがどのような希望を持っているのか入念な調査が行われ，可能な限り希望に沿った本が選定される事例が報告された．また，そもそも自身の成長に見合った本がないと感じる中高生に向けて，文法的には初級向けだが，内容的には中高生が面白いと感じられるジャンルのシリーズ本を新たに刊行するためのプロジェクトが推進された事例についても紹介された．

子ども図書館では，図書館にどのような新刊を配架するべきかについて，子どものリクエストに答えるという形ではなく，可能な限り多くの候補書籍の中から「本の会」の構成員が入念に検討する仕組みが構築されている．本に関わる多様な専門性や熱意を持つ人々が，それぞれの観点から配架すべき本について議論し総意を形成するというプロセスを通じて，本と人が出会う図書館という場が創られていることが報告された．

上記のように，本と人とが出会う場にどのような内容の本を用意し，空間をどのようにデザインするべきかについて検討することも，本と人とをつなぐ人の重要な役割であることが示唆された．

5-4. 来館者の変化とアウトリーチの推進

図書館のアウトリーチ活動のあり方について，現在の状況が沢広氏，張替氏，吉田氏それぞれから報告された．

現在図書館では，来訪する利用者をただ待つだけではなく，図書館関係者が積極的に館の外に出て図書館の活動についてアピールしたり，幼稚園，小学校など

図書館以外の機関と共同でイベントを行ったりといった図書館外部でのアウトリーチ活動がますます重要になっている．図書館への来館者数に影響を与える要因には様々な事象が複雑に絡み合っており一概に特定することは困難だが，児童書というジャンルに関して言えば，来館が難しくなるひとつの理由として共働き世帯の増加が考えられる．

沢広氏からは，デンマークの公共図書館において未就学児と保護者が参加することを想定したイベントを開催する際，参加者を集めることが困難であること，その背景には，子が 1 歳になると仕事に復帰する保護者が多数を占めることが関係していることが語られた．現在では，イベントは図書館で実施されるのではなく, 保育園等に図書館関係者が赴いて実施されるように変化してきているという．

また，日本においても，平日に未就学児を伴って子ども図書館に来訪する人の数は減少傾向にあることが吉田氏より語られた．保護者が共働きの場合，土日など仕事の休日でしか図書館を来訪することは困難であり，このことが図書館への来訪頻度を下げている可能性があることが示唆された．

図書館の存続のためには，既に本を読むことに対しモチベーションがあり，図書館に来館する習慣のある市民だけを対象とした活動を展開するだけでは十分ではない．より多くの来館者を得られるよう，図書館に来館する習慣のない市民にいかに図書館の存在をアピールし，新たな来館者を得られるか検討することも本と人とをつなぐ活動の重要な一面となっている．

デンマークにおいては，図書館への来館に関してモチベーションが低い市民に向けた施策が積極的に展開されている．先述した図書館に本の閲覧・貸出以外の機能を持たせ来館者の幅を広げることもその一環である．さらに，図書館の本を学校を中心とした教育施設にまとまった冊数で運び込み，定期的に本を入れ替えながら読書を促すという，図書館の本を外に持ち出し用いることによって本への関心を広げることを意図した施策も実施されていることが沢広氏から報告された．

東京子ども図書館の場合には, コロナ禍により長期間通常通りの開館が難しく，開館日が減少したり不規則になったりした時期が続いたことにより，近隣地域の利用者が減少傾向にあることも言及された．この状況を打開するため子ども図書館においては，近隣の小学校を訪問し，子ども図書館について紹介する活動が展開されている．

6. 終わりに

本稿では 3 つの事例から，本と人とをつなぐ人の活動状況について，4 つの観点を整理した．図書館員をはじめとした本と人とをつなぐ人々が，大人と子どもが共に物語を読み聞きする場づくり，選書の基準の選定とプロセスの推進管理,

図書館への来館者をはじめとする本との出会いを求める人々への適切な本の案内など，多様な役割を通じて本と人とをつなぐ場を創造していることが示された．

その一方で，特に図書館においては，人件費をはじめとした財源の少なさ，共働き世帯の増加，ボランティアとして関わる人の増加をはじめとした図書館を取り巻く人的環境の変化など，新たな状況に対応することが現在求められている．従来から本に興味がある人を施設の中で待つだけではなく，今まであまり本を読むことや図書館に来館することに関心を持たなかった人にまで対象を広げ，積極的なアウトリーチ活動を展開することが試みられている．

様々な環境の変化の中で，文学の力，フィクションの力が社会に浸透するために，本と人とをつなぐ活動が今後どのように展開可能かということについて，引き続き調査が必要である．

本研究は JSPS 科研費 20K00521 の助成を受けたものです．
読み聞かせ企画に出演いただいたさくらこりん氏，研究会での講演に登壇いただいた沢広あや氏，インタビュー調査にご協力いただいた張替恵子氏，吉田真理氏に心から感謝いたします．

Creating a place where children's literature and readers can meet

-Three case reports on the role of “connecting” works and readers

Konomi Higo

Abstract

This paper presents examples of activities undertaken by individuals who play a key role in “connecting” works with people, creating opportunities and spaces for children to engage with literature and directly deliver works to readers.

In this paper, the author discusses three cases. The first case is a storytelling event featuring picture books, held at the Osaka University International Studies Library. The second case is a record of the keynote speech given at a seminar. The keynote speaker has been involved in activities related to books and people in Denmark. The third case is an interview with staff members of the Tokyo Children's Library.

Based on these three examples, the author proposes four perspectives that should be focused on when developing activities that bridge children's literature and its readers.

参考文献

＜邦文文献＞

Jan Egesborg 他著，前田京剛監修，田辺欧監訳. 2020.『フィン・フォトンさんと量子力学』. アグネ技術センター.

松岡享子. 1996. 『お話について』. 東京子ども図書館.

＜インターネット上の資料＞

東京子ども図書館　https://www.tcl.or.jp/

一般社団法人 KIO　https://kiito.jp/people/kio/